

丹羽健夫著

## 『留学と日本人』

名古屋外国語大学出版会、二〇一五年

高橋直子



「空海からノーベル賞受賞者まで われわれは何をめざして海を渡るのか」

本書は聖徳太子の時代から現代に至るまでの日本人による留学について、私達が歴史教科書の中では得られない興味深いエピソードを盛り込み、どの世代にも分かり易く解説している。読み進めていく中で、読者は日本人としてのアイデンティティと誇りを深く感じる事ができるだろう。

日本が他の大陸諸地域の文化文明を積極的に導入しようとして、留学生を派遣してきた歴史の流れには、三つの「波」があるという。第一回が「古代」奈良朝、平安初期に、中国の隋・唐王朝の文明の中心であった長安へ人を派遣してきた時代」、第二回が「江戸時代、特に幕末から明治維新を挟んで明治にかけて、近代化した西欧諸国に追いつくことを目指した時代」、そして第三回が「第二次世界大戦後に、民主主義、文系学問、言語の習得に、アメリカを中心に留学生が海を渡った時代」である。

第一章「古代編」では、遣隋使（六〇〇年―六一四年）、遣唐使（六三〇年―八九四年）、そして遣明使（一四〇一年―一五四七年）が中国大陸に渡った時代が描かれている。かの小野妹子も聖徳太子の国書を携えて遣隋使に参加している。これらの使節が日本に何をもたらしたのか、当時どのような船で大陸に人々が渡ったのかなどが語られている。

第二章「江戸時代・幕末編」では、国内における「遊学」「他国修行」の話から始まり、遊学の聖地であった長崎を取り上げるとともに、幕末の一八五

三年に黒船が浦賀にやってきた後、人々が外国への強い興味関心を持った世の中の様子が生き生きと写し出されている。松下村塾で次の時代を担う人々に影響を与えた吉田松陰、倒幕に重要な役割を果たした坂本龍馬、中濱万次郎（通称・ジョン万次郎）の幕府における役割、欧米人および欧米に渡航した者たちが次々と攘夷―暗殺の標的にされたことなど、当時の多くの逸話が紹介されている。

第三章「明治編」では、留学を体験した人々が次々に活躍した時代が描写されている。明治年間で二万人に及ぶ留学生が近代国家・富国強兵国家建設のために海を渡り、当時の文部省予算の三分の一が留学生支出に充てられていたという話には驚く。また、一〇七名が欧米を渡った岩倉使節団（岩倉具視、大久保利通、伊藤博文、木戸孝允、勝海舟、福沢諭吉らが参加）に焦点が当てられている。その中で興味深いのは、使節団は女子五名を含む六歳から二十代の留学生四十三名を世界各地に派遣し、十年計画で留学先に滞在させたという話だ。その留学生達は帰国後日本に多大な貢献をもたらすことになるが、その女子の一人は、後に津田塾大学の創始者になる津田梅子だ。まさしく近代女子教育の幕開けである。他に、軍閥係（東郷平八郎など）、音楽（滝廉太郎など）、文学（森鴎外、夏目漱石など）、医学、美術など、実に多くの分野で明治政府が留学生を排出していた様子が読み取れる。

第四章「大正・昭和編」では、大正から太平洋戦争終戦後にかけて留学の熱が衰えた時代を描いている。その時代の異色の留学生として、レーダーを開発した八木秀次、連合艦隊司令長官であった山本五十六、そしてナチスからユダヤ人六千名を救ったとされる杉原千畝を挙げている。また、戦後に米国フルブライト制度による留学が盛んに行われたことや、ノーベル賞受賞者や歴代総理大臣達の留学経験についても詳しく触れている。

最終章は「現代の留学―勉強のできない子はいかにして学ぶか」という章題が付けられ、作者の勤務する予備校と米国のコミュニティカレッジとの提携プログラムの立ち上げの記録と、教員達と学生達による留学準備から卒業するまでの挑戦、葛藤、成功が生き生きと描かれている。その中で「現状で学力が低いのはかまいません。しかしガッツのある子、ヤル気がある子を送って下さい。ガッツやヤル気はデジタル化できません。」というコミュニティカレッジの学長の言葉が紹介されている。遣隋使の時代から現代まで、日本人が留学というものに求められてきたものが、まさにこの言葉に集約されている。